



# 教皇様の聲

# 11

# 223号

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 ©1998

## 「私は真理を証明するために来た」

王であるキリストの祝日

■ 典礼暦年の最後の日曜日となる今日、教会は万物の王・私たちの主イエズス・キリストの祝日を祝います。福音書朗読はポンシオ・ピラトとイエズスとの問答の場面です。「あなたはユダヤ人の王か。」(ヨハネ18・33) イエズスは答えの代わりに尋ねます。「あなたは自分でそう言うのか。あるいは、他の人が私のことをそう告げたのか。」(18・34) ピラトは言い返します。「私をユダヤ人だと思うのか。あなたの国の人と司祭長たちがあなたを私に渡したのだ。あなたは何をしたのか。」(18・35)

ここでキリストは宣言なさいました。「私の国はこの世のものではない。もし私の国がこの世のものなら、私の兵士たちはユダヤ人に私を渡すまいとして戦っただろう。だが、私の国はこの世のものではない。」(ヨハネ18・36)

これで何もかも明らかになりました。司祭長らの告発に対し、イエズスは自分の王権がこの世のものではなく、神と霊の王国のものであることを明かされました。ピラトは確認のため尋ねます。「するとあなたは王か。」(18・37) ここに至って、王としての尊厳にいかなる誤解の余地も残さぬ明快さで、イエズスは自らの真の王権を示します。「私は王である。私は真理を証明するために生まれ、そのためにこの世に来た。真理につく者は私の声を聞く。」(18・37)

イエズスは衆議会の人々が理解していたような王だったわけではありません。実際、イスラエルにおける政治的権力など何一つ求めておられなかったのです。その王国はパレスチナの国境を越えて、真理につく者はみな彼の声を聞き(ヨハネ18・37参照)、王であると認めました。これこそがキリストの王国とその霊的次元の全貌です。

■ 「真理を証明する。」(ヨハネ18・37) 黙示録には、イエズス・キリストが「忠実な証人」(1・5)であると書かれています。キリストは神の秘義を啓示し、神の国の到来を告げ知らせるから、証人なので

す。キリストはこの王国の最初のしもべです。「死ぬまで、十字架上に死ぬまで」(フィリッピ2・8)従順を貫くことで、キリストは創られたこの世界のあらゆるものに及ぶ御父の力を証しします。その王権が発揮されるのは、ゴルゴタで主が抱きしめた十字架の上なのです。それは不面目な死でしたが、福音が告げている神の国を約束するものです。敵の目には、その死はキリストが話されたこと、行なわれたこと全てが嘘であったことを証明するかに見えました。「あの男はイスラエルの王だ。さあ十字架を下りよ。そうすればわれわれも信じる。」(マテオ27・42) キリストは十字架から下りはしませんでした。良い羊飼いのように、羊のために命をお捧げになりました(ヨハネ10・11参照)。しかしその後、三日目に死からよみがえり、「死者の中から最初に生まれた者」(黙示録1・5)であることを示して、王の力を証明されたのです。

### 離れていても、いつも教皇のそばにいる

従順なしもべキリストは、王です。「死と黄泉の鍵を持っている」(黙示録1・18)からです。死と地獄とサタンを征服したキリストは、「地上の王の君」(1・5)でもあります。地上の全てのもものが死に屈服しているのに対して、死に勝つ力を持つ御方は、全人類に不死の生命への希望を開きました。彼はアルファであり、オメガであり、創造全体の始めであり、終わりです(黙示録1・8参照)。こうして全ての人が、「祝されんことを、いまや来る、ダビドの国」(マルコ11・10参照)と繰り返すことができるのです。

■ 兄弟姉妹の皆さん。こうしてご一緒に、王であるキリストを祝う聖体祭儀に加わられたことを嬉しく思います。…親愛なる皆さんと、それに高齢の方々、病に伏す方々、孤独をかこつ人々に、心からのご挨拶を申し上げます。

この小教区はローマ市の端に位置し、教皇の住居からはかなり離れていますが、皆さんはいつも私の傍ら

におられるのも同然です。多くの新興地域と同じくこの地域でも、高齢者や若者、子供たちのための社会施設がまだまだ不足しています。以前にも言いましたが、小教区は人々が集う唯一の中心であり、地域社会にとって不可欠な貢献をしています。ですからローマ教区には、礼拝の場としてのみならず不足している様々な社会的サービスを提供する場としてもふさわしい小教区作りという価値ある努力を続けてくれるよう、期待しています。この場を借りて、ローマ市民の皆さんに寛大な支援をお願いしたいと思います。「二千年にはローマに50の教会を！」ローマの各地区に、教会を設けるために。

この地区では、聖ヴィンセンシオ・ア・パウロの霊的子供たちが、特に一般の人への布教を通じて福音宣教の仕事を続けています。その熱意には頭が下がります。このような布教活動は、郊外でのみならず、ローマ市内でも必要です。それらは、「使命を帯びた民」としての神の民の本当の姿を表わす新しい形で組織されなければなりません。(…)

#### 若い人たちを教会に近づける

要理教育者の皆さん、教区協議会の皆さん。時に苦勞が報われないことがあっても、寛大に福音宣教の仕事を続けてくださるようお願いしたいと思います。主は皆さんと共におられ、決して教会をお見捨てになることはありません。

家庭を築いている皆さん、使徒パウロが書いているように寛容ですべてをゆるし、すべてを希望する(1コリント13・4、7参照)愛に生きることをどうか恐れな

いでください。

親愛なる若者の皆さん。教会が皆さんを必要としていることを、繰り返しお伝えしたいと思います。さらにつけ加えれば、皆さんも教会を必要としています。教会の望みはただ一つ、皆さんがイエズスと出会い、自由に愛し、仕えるようになることだからです。

教会が皆さんを必要とする理由は、ただキリストだけが与えることのできるまことの自由を体験した皆さんには、友人や同僚の間で勇気をもって、自分自身のやり方で、若さに特有の感受性と才能を使って福音を証する力があるからです。若者たちへの宣教が、若者とキリストとの、また若者と教会との出会いを育んでくれますように！

兄弟姉妹の皆さん、本日の典礼は、王であるキリストの真理が旧約の預言の成就であることを思い起こさせています。預言者ダニエルは、「権勢、威光、国が与えられ」(ダニエル7・14)た人の子の到来を宣言しています。「諸民、諸国、諸国語の者が彼に仕えることとなった。その勢力は永遠のもので、過ぎ去ることがなく、その王国は滅びることがない。」(7・14)これら全てがキリストにおいて、その受難と死と復活において、完璧に実現されたことを私たちはよく知っています。

宇宙の王キリストの祝日を祝う私たちは、信仰を込めて御父への祈りを繰り返します。イエズス自身が教えてくださった祈りです。「御国が来たらんことを。」

主よ、御国が来ますように！「真理と生命の王国、聖性と恩寵の王国、正義と愛と平和の王国」が。

アーメン！

(97・11・23)

## 死者のために祈ろう

● 今年は、クリュニー修道院の第5代院長だった聖オディローが、世を去った全ての信者を記念する日(死者の日)を制定してから一千年目に当たります。(…) 私たちの前から去った人々を記念する典礼にあずかる全ての人の間に、私も喜んで加わりたいと思います。実に、教会が喜びを込めて聖人たちの交わりと人類の救いを祝う諸聖人の祝日のすぐ翌日に、全ての死者のため特別の祈りを捧げるよう、聖オディローは修道士たちに勧めたのでした。そうすれば、死んだ人たちが至福に入れるよう霊的に手助けすることになるからです。死者のため荘厳に取り次ぎを願う典礼(聖オディローはこれを死者の日と呼びました)はクリュニー修道院から次第に広がって行き、今では世界中の教会で行なわれています。

● 死者のために祈る時、教会はまずキリストの復活の秘義に心をひそめます。キリストは十字架を通して私たちに救いと永遠の生命をもたらしてくださいました。ですから私たちもたえず繰り返します。「十字架こそ私の助け、私の道、生命。十字架は無敵の力、全ての悪を追い払い、闇を打ち払ってくれる。」主の十字架は、例外なく全ての人が復活祭の光に照らされていることを思いださせます。キリストが死に勝ってまことの生命への道を開いてくださったからです。贖いは「キリストの奉獻によって実現しました。キリストは人間の負債を返し、人間に神との和解をもたらしました。」(『紀元二千年の到来』7番)

清めの時が終われば、愛する人に出会える

● 私たちの希望の基はキリストのいけにえです。キリストの復活は「終わりの日々」(Iペトロ1・20、ヘブライ1・2参照)が始まったことを告げています。私たちが使徒信経で告白するように、永遠の生命を信じるということは、直接に神を見るという嬉しい希望への招きです。身体によみがえりを信じるとは、全て人間の生命には「もう他には何も望むものがないというくらいまで人間の欲求を満たしてくれる」(トマス・アクイナス「神学大全」I-II, q.1, a.5、ノラの聖パウリヌス「書簡」1, 2) 最終目的・究極のゴールがある」と認めることです。同じ願望を、聖アウグスチヌスはみごとに言い表わしました。「神は私たちをご自身のためにお創りになりました。私たちの心は、神のうちに憩うまで安らぎを知りません。」(「告白」I, 1) このように私たちは皆、御父の右の座につくキリストと共に生き、聖なる三位一体を見つめるために召されています。「神こそキリスト信者の希望の第一目的である」(聖アルフォンソ・リゴリオ「イエズス・キリストへの愛の実行」16, 2) からです。ヨブと共に言うことができます。「私を守るものは生きておられ、仇討つものはちりの上に立ち上がるのだと私は知る。皮膚がこのようにきれぎれになっても、私はこの肉で神をなごめるだろう。この私自身が、他人ではなく私自身の目で見るだろう。」(ヨブ19・25~27)

● キリストの神秘体は、歴史の終わりに再び一つになることを願っていることをも、思い出しましょう。その時、神秘体の全てのメンバーは完全な至福の状態にあり、神が全ての中の全てとなっているでしょう。(オリゲネス「レビ記に関する説教」7番参照) 実際、教会は子供たち全員と全人類の救いを願っています。「私たちは救いのために教会が必要だと信じています。キリストこそ唯一の仲介者、救いの道であり、その御体である教会の中に現存されるからです。しかし、神の救いの計画は全ての人に及びます。自分自身に落ち度がないままキリストの福音と教会を知らず、真剣な心で神を捜し求める人々、良心に従って行動しつつ恩寵の導きで御旨を果たそうと努力する人々は神の民であり、どのようにしてかはわかりませんが、永遠の救いに入ることができるのです。」(パウロ6世「神の民のクレド」1968年6月30日)

死が最終的に打ち負かされる時が来るまで、「主の弟子たちのある者は地上に旅を続け、ある者はすでにこの世を去って清めを受けており、ある者は『三位一体の神をありのままに』ながめつつ栄光を受けています。」(第二バチカン公会議の教会憲章49番。エウジェニウス4世の回勅レタンテウル・チェリ参照) 聖人たちの功德にあずかることで、私たちの兄弟的な祈りは至福直観を待ち望む人々の助けになります。死者のための取り成しは、神の命じたとおりに生きる人々の生

活と同様、功德となって救いを得るために役立ちます。それは一つの神の家族による、兄弟愛の表われです。そうすることで私たちは「教会の本質的使命に答え」(教会憲章51番)、「永遠に神を愛する人の靈魂を救う」(リジュのテレジア「祈り」6、原稿A, 77参照)のです。煉獄の靈魂たちにとって、永遠の幸福を望み、愛する人に出会うことを待ち望むのは苦しみの種です。罪の罰を受けねばならないので、神と離れているからです。それでも罰の時が終われば、待ち望んでいた御方(詩篇42、62参照)との出会いに赴くことができると確信しています。

### 取り成しの祈りは 死者のため大きな価値がある

● キリストに従った人々の生涯を考えると、善良で高潔なキリスト信者の生活を送り、「神の御国にふさわしい者」(IIテサロニケ1・5)になればと励まされる思いがします。そこで私たちは日ごと永遠の生命に備えられるよう、ペロー枢機卿の言葉を借りれば「超自然の警戒」を続けるべきです。ニューマン枢機卿が強調したように、「ただ信じるだけではだめで、警戒しなければなりません。愛するだけではだめで、警戒しなければなりません。従うだけではだめで、警戒しなければなりません。…このように、警戒していることこそがキリスト信者にふさわしい試金石になります。」と言うのも、警戒するとは「目の前のことから離れて見えないものに生きること、かつておいでになり、再び来られるであろうキリストを思いつつ生きること、そしてその再臨を待ち望むこと」だからです。(「説教集」IV, 22)

● 教会が神に捧げ続ける取りなしと嘆願の祈りには、大きな価値があります。その祈りは「神の憐れみに一致した心に特有のもの」(カトリック教会のカテキズム2635番)です。主は生きるものの神ですから、いつでも子供たちからの嘆願には心を動かされてしまいます。聖体祭儀の中で、いろいろな祈願や死者のための祈願を通じて、一同は憐れみ深い御父の前に死んだ人々を指し示し、もし必要なら彼らが煉獄の試練を経て清められた後、永遠の喜びに入ることができるよう願います。死者を主に委ねることで、私たちは死んだ人々との連帯に気づき、聖徒の交わりというこの素晴らしい秘義の中で死者の救いにあずかるのです。煉獄の靈魂たちは「信者の祈りと、何よりも祭壇の上で捧げられるいけにえによって助けられる」(トリエント公会議、煉獄についての教令)と教会は信じています。「施しその他の信心のわざ」(エウジェニウス4世の回勅レタンテウル・チェリ)によっても、同様です。「実際、教会の聖性にあずかることによって生じる信徒の聖性は、〈聖徒の交わり〉としての教会を建設す

るための信徒の最初の、そして基本的な働きを示しています。】(『信徒の召明と使命』17番)

● というわけで、私はカトリック信者の皆さんに死者のため、残された家族のため、また亡くなった全ての兄弟姉妹たちのために熱心に祈るようお勧めします。罪に課せられた罰を免除されて、主の御声を聞くことができるように。「愛する者よ、来て、私の腕に眠りなさい。ここには永遠の喜びが用意され

ているから。】(サレジオの聖フランシスコ「信心生活入門」17,4)

死者のために祈る信者を聖母と、良き死を迎えるための守護聖人である聖オディローと聖ヨセフにゆだね、私からの使徒の祝福を送ります。(…)煉獄の靈魂のために祈り、聖体にあずかり、死者のため犠牲を捧げる全ての人にも、祝福を送ります。

バチカンにて、1998年6月2日。

## 教皇様の動き

● 10・9 教皇庁移住・旅行者司牧評議会主催の「紀元二千年を前にした移民問題」に関する会議参加者を迎えて。「誰でも祖国で生活する権利があります。人々が国を追われたいためにはバランスの取れた経済発展、社会的不平等の是正、人権尊重と民主化が不可欠です。…人種差別や偏見を非難するだけでは足りません。政治レベルでの対策が必要です。」

● 10・10 国際キリスト教財界人連盟の世界大会出席者を迎えて。「地球規模の広がりを見せる経済プロセスが、人々を排斥したり疎外するものであってはなりません。誰もが社会や技術の進歩の恩恵を受け、創造の実りを享受するべきです。」「どうかビジネスにおいても、正義と連帯の原則を守り、人間の福利発展につとめてください。」「この豊かな社会においても、新旧様々な姿の窮乏を目にします。国を追われた難民や不法滞在者、必需品にも事欠く家庭、多くの失業、見捨てられた老人や病人など。どうすれば彼らの必要に答えることができるでしょうか。」

● 10・11 朝、教皇さまは聖ペトロ広場にて、第二次世界大戦中アウシュビッツ収容所で死亡したカルメル会修道女エディット・シュタインの列聖式を行なわれた。新聖人は「イスラエルの傑出した娘であると同時に教会の忠実な娘です。」教皇さまは聖人がユダヤ教徒とキリスト教徒の相互理解を強める架け橋となることを願われた。「神と人類への愛によって、心から訴えます。二度とこのような恐ろしい企て(大戦中のユダヤ人迫害を指す)が、地球上のどこでも、どんな民族、人種に対しても、向けられることはありませんように!」「聖人は教えてくれました。愛のないものを真実と認めてはならない。真実でないものを愛と認めて

はならない。どちらが欠けても、それは偽りであり、有害です。」「キリストへの愛は苦しみを通っていきます。聖人は十字架の秘儀を理解し、自己を捧げました。私たちの多くは十字架を黙らせようと望みますが、沈黙した十字架ほど雄弁なものはありません。苦しみは愛を学ぶ場です。愛は苦しみから実りをもたらし、苦しみは愛を深めます。」

● 10・13 長年に渡り教会やカトリックのボランティア団体、また教皇さま自身も飢餓や栄養失調との戦いに貢献したとして、国際農業機関は感謝を込めて教皇さまを表彰し、メダルを授与することとなった。メダルにはパウロ六世の言葉「日々の糧は世界平和の必要条件である」が刻まれている。

● 10・14 恒例の一般謁見で、堅信の秘跡に関するお話を続けられる。「洗礼と堅信の秘跡を受けた信者は、神の霊の導きを受け、主キリストの証人となる用意のあることを教会の前でござそかに宣言します。」「私たちの心を満たしてくださる聖霊に感謝しましょう。聖霊に心を開くなら、あらゆる時代の聖人たちのように私たちも、キリストへの愛ゆえに命も惜しまぬ殉教者にさえなることができますのです。」謁見の最後に、教皇さまは「教皇職在位20周年に当たり、私のために祈ってくださった全ての人々に心から感謝いたします。忠実に職務を果たすため、皆さんの霊的な支援を大いに頼みとしています」と述べられた。

● 10・15 聖職者会議への出席者を迎えて。「司祭は自分に委ねられた人々を導かねばなりません。…教会は御父から遣わされた御子が、聖霊を通して12人の弟子に与えた使命を受け継いでいるからです。さらに司祭は、司教と一致してみことばを教える教師です。」

「教皇様の聲」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙

■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円

詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人■精道教育促進協会 〒659-0093兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-31-3452・FAX. 0797-31-3448